～ふくしまの歴史と文化財～

文 字 摺 通 信

第　１０３　号
２０２６年　１月　１日
発行:文字摺歴史文化社

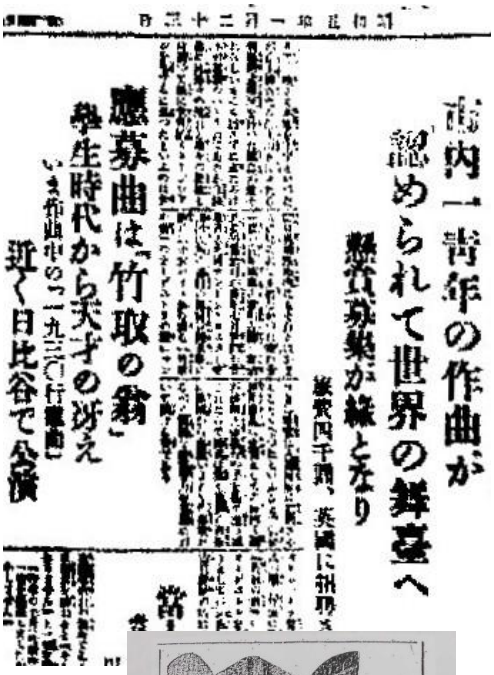
謹賀新年！丙午です。また、出生率が下ります？！

〝歌は世につれ、世は歌につれ〟
昭和の歴史は歌謡曲の歴史

第３回　昭和５年　ふくしま　その１

昭和５年（1930）は福島市の音楽事情にとって、非常に大きな変節点となる年でした。この一年を古関裕而を中心に見ていきたいと思います。

１月２３日の地元紙『福島民報』『福島民友』両紙は国際作曲コンクールで古関裕而が入選したことを大きく報じた。右は『福島民報』の紙面であるが少々長いので、同日の『福島民友』の記事を以下紹介する。


市内一青年の作曲が
認められて世界の舞臺へ
懸賞募集が縁となり
應募曲は「竹取の翁」
學生時代から天才の呼え
近く日比谷で公演

「世界的に認められた！一無名青年の作曲。
一流音楽家に互して二等当選　福島市の古関裕而君

埋もれてゐた世界的作曲家が福島市から現れ出で郷党人を驚かした。右は福島市新町喜多三呉服店主古関三郎氏長男裕而君（二二）といふ目下川俣銀行に勤務してゐる一介の青年で、同君は昨年十月中英国ロンドン市のチエスター楽譜出版社で募集した作曲に『竹取物語』外三曲を応募した所、世界中の一流作曲家を凌いで美事第二等に当選し、大作曲家連を顔色なからしめ賞金四千円を目下ロンドンにゐる日本大使館書記で同君の従兄に当る大島俊一郎氏の手を経て渡されたが同君はこの栄誉を何故か今日まで厳秘にしてゐたものである。」

われらの
テノール
藤原義江獨唱會
伴奏　近衛秀麿氏
期日　十一月廿一日
會場　福島市公會堂
主催　福島民報社

ここで一つ疑問が湧く。この年の６月に愛知県豊橋に住む内山金子さんと結婚するのですが、金子さんが裕而を知るきっかけは、国際コンクール入賞の記事を読み「私この楽譜欲しいから送ってもらいたいわ。手紙でも出そうかしら」（『古関裕而物語』斎藤秀隆）であった。作曲コンクール入賞のニュースは、福島の地元紙だけでなく、遠く離れた愛知県豊橋の新聞にも載ったのである。で、あるならば当然、東京の新聞にも載ったのであろう。私の疑問は、なぜ、